病院図書室　16(4):135-138, 1996

特集　病院図書館員の専門性と役割

医学図書館に求められる専門性

山　口　直比古

1．はじめに

編集部よりのご依頼の論題は「これからの医学図書館に求められる専門性」というものでしたが、私は勝手に「これからの」という部分をはずさせていただきました。正直申しまして、先のことはわかりません。しかし、今現在何が求められているのかにつきましては、私なりにしっかりと理解しているつもりでおります。従いまして、これから先はともかく、今医学図書館員にどのような専門性が求められているのかについて記させていただくことを、まずお許しいただきたいと思います。

また、インターネットであるとかマルチメディアであるとか、新しい環境に対応していかなければならないということもここでは多くは触れないつもりです。ここではもっと原則的で当たり前のことについて、再確認するという意味で医学図書館員の専門性について述べてみたいと思います。新しい技術についてのお話は、皆様目にする機会は多いだろうと思います。そちらのほうでお勉強いただければと思います。

2．医学図書館員とは何か

まず、私たち医学図書館員の立場について再確認することから始めたいと思います。私が医学図書館員として大きな影響を受けた論文に『Handbook of Medical Library Practice. 3rd. ed.』の中の Zachert の論文があります[1]。これから書きますことはほとんど彼女の受売りと思ってくださってもかまわないでしょう。彼女はこの論文の中で「一言でいうなら健康科学図書館員というのは、情報源の知識と健康情報の性格を駆使して、患者や一般大衆の利益を守ることである。」と書いています。私なりに言葉を変えて表現いたしますと、「医学・医療の進歩発展に貢献する」ということです。更に別な言葉で言いますと、「我々医学図書館員は医療従事者である」ということなのです。医師や看護婦さん、技師さんと同じように、患者さんの健康や生命に関わる大切な仕事をしているのです。

3．役に立つ図書館員

そのことを前提とした上で、それでは医学・医療の発展に貢献するために、医学図書館員は何をしなければならないのでしょうか。私なりの結論を申し上げれば、「役に立つ図書館員」になるということです。どの病院図書室にも医療に従事する利用者が数多くいる訳で、その人たちにとって役に立つということが最も大切なのです。では、役に立つというのは具体的にどのような事柄をさすのかということですが、これはその場合場合によって違ってまいります。多くの病院図書室の司書の方は医師の抄録の原稿をワープロで入力

やまぐち　なおひこ：東邦大学医学部図書館

したり、スライドを作ったり、これが本当に図書館員の仕事なのだろうかと思われるような仕事に多くの時間をさかれていることだろうと思います。場合によっては、これが役に立っているのです。非常に図書館員的な仕事と思える文献複写の申し込みについてはどうでしょうか。毎日医師から大量に持ち込まれる文献複写依頼の所蔵館を探し、心の中で多くてごめんなさいといいながら申し込みの葉書を書いたりファクシミリ用紙にタイプを打ったりして一日が終わってしまうという日もあるでしょう。これも役に立っているには違いありません。でも皆さんは、本当にこれでいいのかとも心のどこかで感じているのではないでしょうか。そこであえて申し上げますが、これでいい訳はありません。みなさんは医学図書館員ですから図書館員でなければできない仕事で、医学や医療の進歩発展に貢献するべきなのです。

4．図書館員でなければできない仕事

では医学図書館員でなければできない仕事とは何でしょうか。それは「人的支援サービス」です。

私は現在という時代は「多様な発展をとげつつある過渡期である」と同時に、様々なものが「質的転換を求められている時代」であると考えています。図書館で扱わなければならない情報は、20年前までは本と雑誌、それに参考資料に掲載されているものが主たるものでした。私たち図書館員は参考資料に精通していれば、十分に図書館員としての役割を果たすことのできた時代でした。しかし現在では、情報は電子的なネットワークの中に散在し、それらを捜し出す技術を知らなければなりません。ネットワーク上にあるWWWのサイトは、もはや情報の媒体と呼んでもよいでしょう。CD－ROMくらいでしたら目に見え、手に取ることもできますので、いかにも新しいメディアという実感が持てますが、メディアの多様化は正直いいまして私たちの想像を越えて発展しています。「歴史は常に過渡期である」といったのは英国の歴史学者カーですが、そのような意味では、私たちはクリアに解決された情報環境の時代、というのは見ることができず、常に発展し続ける世界と付き合っていかなければならないのかもしれません。

そうした発展し続ける環境の中では、当然古い質のままでの図書館サービスというのは、いずれ役に立たなくなるでしょう。現在は文献複写の量が増大しており、量的なサービスを我々図書館員は強いられています。しかし、いつまでもこれで良い訳はありません。サービスの中味が問題とされるべきではないかと私は考えています。つまり、図書館のサービスの質的転換が求められている時代であると思うのです。これまでは、利用者のリクエストに応じて文献情報などを提供してきましたが、ネットワークを通して、図書館へ来なくとも自由に自分で情報を入手できるようになりつつある現在、研究や診療への人的支援サービス、つまり研究の方法やそのための情報の入手の仕方、情報の評価の仕方、更に論文のまとめ方まで、一連の活動を人的にサポートしていくということが求められていると考えるのです。ネットワークで情報が入手できるということは、本当に図書館員の手助けを必要とする利用者だけが図書館を訪れるということで、その時に利用者の期待に応えられるようなサービスの質を持っていなければならないということなのです。

アメリカで行われている Clinical Medical Librarian についてはみなさんお聞きになったことがあろうかと思います。臨床カンファレンスに出席し、その場で必要になった情報を即座に提供するというものです。ここには病院図書室に働く図書館員のある意味での究極の姿があると思います。もちろんこれには大学での教育であるとか、現場での経験であるとか様々な壁がありますので、とりあえずは医師から臨床症例の相談を受けるほどの信頼を得ていただきたいと思います。

5．役に立つ医学図書館員になるために
－専門職への道－

ではよく訓練された経験豊かな図書館員になるためにはどうしたら良いのでしょうか。これもキーワードとして表現しますと「自己研鑽とネットワーク」ということになります。

自己研鑽の意味はおわかりいただけるだろうと思います。勉強しましょうということです。日本医学図書館協会では今年「２１世紀の医学図書館」という指針を出しましたが、その中でも「自発的かつ継続的な学習」が大切であることを指摘しています[2)]。またその序文の中でも、「医学図書館員は組織的な教育体制の整備を待つのではなく、自ら自発的に、そして継続的に学習を行うことによって、専門職としての責務を遂行すべきである。医学図書館員が蔵書の番人という地位にとどまり続けるのか、あるいはそこから脱却して新しい世界を切り開いていくのか、それはひとえに医学図書館員ひとりひとりの情熱にかかっている。」と述べています。

では一体何を勉強したら良いのでしょうか。図書館の専門家としての必要な要件として、次のことがよく挙げられます。

1)図書館資料や情報源についての知識がある
2)専門分野についての知識がある
3)コンピュータやネットワークについての知識がある
4)外国語、特に英語のリテラシーがある

１番目につきましてはこれまでも言われてきたことですし、今更説明の必要もないでしょう。また４番目につきましてもできればいいなあ、くらいでも良いと思います。しかしながら、２番目と３番目につきましては、今後ますます重要になります。専門分野の知識といいましても我々は医師ではありませんので、診療に必要な知識ということではありません。医学用語を覚えるということです。中でもMeSHを覚えることをお勧めします。ひとつでも多くの医学用語を知っていることは、医学図書館員にとって貴重な財産です。また利用者と会話する時にも、相手の話す内容が理解でき、専門的な会話にもついてゆくことができます。そうすると利用者の図書館員に対する信頼感も増すでしょう。これは医学図書館員としてのひとつのテクニックでもあります。医学用語で会話できるようになりましょう。

コンピュータは今ではどこの図書室にも一台はあるでしょう。利用者である医師らは案外コンピュータのことを知りません。そこで図書館員がその使い方などを指導することはますます大切な仕事となってきます。なぜなら、コンピュータを使いこなして情報を入手したり加工したりする技術、いわゆるコンピュータリテラシーは、医師や研究者にとって必要不可欠な技術となっているからです。そこで図書館員の役割が重要となってくるのです。図書館利用者の情報リテラシー教育は図書館員の役割です。

次にネットワークということです。まずひとつにはヒューマンネットワークというものがあります。つまり、多くの図書館員と親しくなって、お互いに助け合い情報交換をしましょうということです。一人では解決できないことでも、協力し合えば解決できることも数多くあるでしょう。幸いなことに近畿病院図書室協議会を始め、病院図書室研究会や日本医学図書館協会など組織もいくつかありますので、それらの研修会などに積極的に参加し、友人あるいは仲間をたくさん作りましょう。

もうひとつは文字通りコンピュータネットワークです。すでに書きました通り、現在ではネットワークのいたるところに情報が散在しており、それらの中からすばやく適確に求める情報を入手することは、図書館員にとってとても大切な技術になっています。利用者に情報リテラシー教育をする以前に、まず我々図書館員が情報リテラシーを身に付けて

いなければならないでしょう。何から手をつけて良いかわからないという方には、私はニフティーサーブに参加することをお勧めしています。これはいわゆるパソコン通信ですが、インターネットを利用して電子メールの交換などもできますし、数多くあるフォーラムと呼ばれる会議室で仲間と会話することもいいでしょう。図書館員のフォーラムもあります。要は遊びの感覚で始めると良いのではないでしょうか。コンピュータを駆使する図書館員を眺めて、利用者の図書館に対する認識も変わるのではないでしょうか。

「私は大学で専門的な図書館員としての教育を受けていないので専門職ではない」とお考えの方がいらしたら、それは間違いです。あなたが今病院の図書室で利用者を相手に仕事をしているのなら、あなたは医学図書館員であり専門職なのです。ただ、専門職には専門職としての責任があり、それを全うするために必要なのが使命感と向上心であると私は思います。医療に貢献するのだという使命感とより良いサービスをしたいという向上心です。

6．さいごに

私は昨年自治医科大学で開催された、日本医学図書館協会主催の基礎研修会で「より良い医学図書館員になるための５つのアドバイス」という話をさせていただきました。その時に、サブタイトルとして「過激派の勧め」とつけました。学生運動の盛んな頃にはよく使われた過激派という言葉も、今では死語となってしまいました。こうしたサブタイトルをあえて使ったのは、もちろん半分は冗談ということもありますが、残りの半分は本気でもありました。その意味するところは「理想を高く掲げ、それに向かって限りなく挑戦する」ということなのです。つまり、理想を持つことの大切さ、それに向かって努力することの大切さを知っていただきたかったのです。それが専門職に課せられた使命であると思ったからです。

専門職と認められるようになることは大変難しいことです。更に、専門職であり続けることはもっと難しいことであろうと思います。ともに協力しあいながら、この道を進みましょう。

＜引用文献＞

1)Martha Jane K. Zachert. : The Health Science Librarian. In Handbook of Medical Library Practice. 4th ed. vol. 3 Chicago, 1988. pp. 69-105. Medical Library Association.

2)日本医学図書館協会：２１世紀の医学図書館，日本医学図書館協会，東京，1996.